

地理学視点の福岡：都市圏成長の背景：福岡地理学会設立75周年記念出版

阿部，康久
九州大学大学院比較社会文化研究院：准教授

磯，望
西南学院大学：名誉教授

芳賀，博文
九州産業大学経済学部：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7388878>

出版情報：pp. -235, 2024-11-20. 有限会社 花書院
バージョン：
権利関係：



第Ⅲ部 社会・文化編

第 11 章

福岡都市圏と中山間地域

－那珂川市の取り組みから－

寄 藤 晶 子

1. はじめに

福岡県の魅力の一つに「豊かな自然への近さ」というものがある¹⁾。本章では、福岡市都心部へのアクセスの良さと豊かな自然環境を特徴とする那珂川市を取り上げて、福岡都市圏を支える中山間地域の状況と取り組みを紹介する。

2. 人口の集中と土地利用

那珂川市は福岡市の南に位置する。梶原川などの支流を持つ那珂川が市中央部を南北に縦断し、流域に沿った市域は南北に細長く広がる。北部の平地をのぞけば市域の大部分は背振山地北側斜面にかかるため、宅地は総面積の12%ほどしかなく、山林が70%を占める²⁾（令和2年度統計なかがわ）。

江戸幕府の命で作成された『天保郷帳』によると、1834年には30の村が確認できる。1889年（明治22）の市町村制施行によってそれぞれが合併して、安德村、岩戸村、南畑村を構成した（平凡社地方資料センター2004）。その後、1956年（昭和31）の市町村合併促進法に基づいて、この3村が合併して筑

1) 例えば、都会でありながらすぐそばに自然が多い（福岡県庁ホームページ）ことや、ほどよく都会でほどよく田舎（福岡県移住・定住ポータルサイト）といった言葉は頻繁に使用されている。

2) 山林であるがゆえに、山芋、柿、筍、栗、材木、炭など中山間地域で一般的に見られるものに、蜂蜜やミカン、鶏卵、ゴボウ、農具・紙の生産を組み合わせる形で、近世までの集落はなっていた（『角川日本地名大辞典』編纂委員会・竹内理三編1991）。戦後は福岡市への水道水供給、灌漑用水の補給と洪水調整を目的とした県営南畑ダム（1966年竣工）を筆頭に、脊振ダム（1976年竣工）、五ヶ山ダム（2018年竣工）が建設された。治水が進んだ影響で、近年では、米以外にも、キュウリ・トマト・ナス・ピーマン・キャベツ・ブロッコリー・サトイモなどの野菜、果樹、花卉の育成も進められ、近郊農業化が進んでいる（那珂川市総務部総務課2018）。

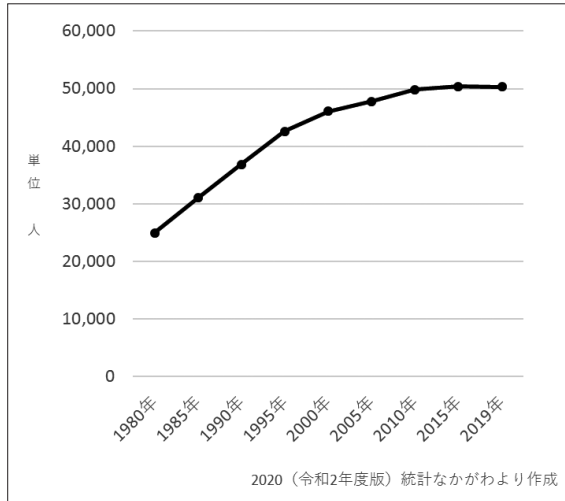


図 11-1 那珂川市の人口推移

紫郡那珂川町となり、2018 年（平成 30）10 月 1 日に那珂川市となった。

住民基本台帳から人口の推移（図 1）を見ると、1979 年（昭和 54）から 1999 年（平成 11）にかけて、毎年 5,000 人規模で人口が増加したことがわかる。市制移行要件である人口 50,000 人に達した 2015 年以降も市の人口は微増減を繰り返している。

「令和 2 年度統計ながわ」によると、2015 年の夜間人口 50,004 人に対して、昼間人口は 41,612 人となっており、ベッドタウンとしての性格を持つことがわかる。また、市内で従業・通学する者（15 歳以上）は、15,426 人（1995 年）から 17,714 人（2015 年）へと増加した。このうち、市内に常住する者の割合が 58%（1995 年）から 51%（2015 年）へと縮小していることから、近年では通勤通学先としての吸引力も加わりつつあると考えられる。

市内に鉄道はなく西鉄バス路線が公共交通の中心であったが、1990 年（平成 2）に隣接する春日市に JR 博多南駅が、駅前ビルが那珂川市側に完成した。JR 山陽新幹線特急車両で博多駅まで片道 300 円、約 8 分で移動可能となり、福岡市都心部へのアクセシビリティが著しく向上した。このことも影響して、市内の人口は、福岡市南区・春日市と隣接する北部地域に集中している³⁾。

3) 比較的早く住宅開発が行われた地区では、現在、住民の高齢化や空家化といった課題も出始めており、自治会活動の維持にも様々な工夫が行われている。

1960年と1998年の国土地理院地形図で市北部一帯の土地利用を比較すると、1960年には小規模な集落とこれを取り囲むように畑や水田、桑畑が見られたが、1999年になると農地に替わって建物が増え、学校も1校から7校へと増えるなど宅地開発が進んだことがわかる。実際、1995年（平成7）に625戸あった農家数は小規模農家を中心に、2015年（平成27）には293戸まで減少し、那珂川市全体で従事者数が半減する。経営耕地面積も樹園地が半減、田が4割減となり、総面積は20年間で縮小している⁴⁾。

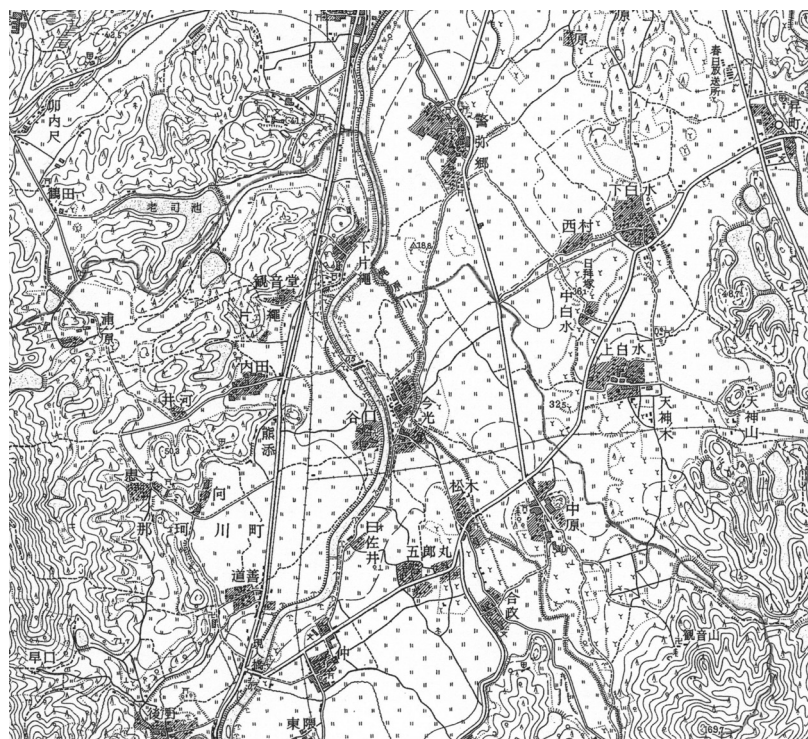


図 11-2 1960年（昭和35）の那珂川町（2万5千分の1地形図「福岡南部」昭和35年修正）から現那珂川市北部を抜粋

4) ただし、専業農家数は61戸から88戸まで増加しており、農地を集積した専業化の傾向が見られる。



図 11-3 1998 年（平成 10）の那珂川町（2 万 5 千分の 1 地形図「福岡南部」平成 10 年修正）から現那珂川市北部を抜粋

3. 市南部の中山間地域の取り組み

市街地化が進む北部とは異なり、南部の中山間地域には自然が多く残る。特に、南畑地域（以下、南畑）は、2020 年 10 月 16 日放送の日本テレビ系番組「アナザースカイ」で登場したタレントが“移住を考える土地”として登場するなど、全国的にも注目を集めてきている。

南畑（ミナミハタ）とは、那珂川市南部に位置する中山間地域で、市ノ瀬（イチノセ）・埋金（ウメガネ）・寺倉（テラグラ）・南面里（ナメリ）・成竹（ナルタケ）・不入道（フニユウドウ）の 6 区からなる。通勤通学の困難さから人口が減少し続けていた同地区の区長らは南畑地域の持続可能性において人

口回復が至上命題とし、“誰もが住みたくなる南畑”という方針のもと、2013年以降、移住促進関連事業に力を入れてきた⁵⁾。

市職員によると、南畑では2012年に区長らで構成する「南畑地域活性化検討委員会」を開始した。この委員会では、教育、広報、農業、交通、開発の5テーマで南畑の活性化を議論したが、中でも人口減少への対処と小学校の維持が重視され、移住政策が焦点化された。翌2013年、区長らは“誰もが住みたくなる南畑”の形成を目的とした「南畑活性化協議会」（以下、協議会）を立ち上げ、交流人口、関係人口そして移住へのきっかけとなりうる地域の魅力発信に力を入れることとなった。

協議会ではFacebookを開設するだけでなく、地域活性化プロデューサーとして他地域で成果をあげていたブンボ株式会社の江副直樹氏を招聘したほか、2014年からは地域おこし協力隊を導入するなど、外部の専門人材を積極的に活用することで、外からの視点を地域の魅力発信に活かした（内閣府サイト）。

南畑への移住促進については、行政も2015年より「福岡R不動産」との事業連携を開始し、入居可能な住宅の把握と不動産仲介の仕組みを整備した。この福岡R不動産とは、不動産仲介業の株式会社DMX（福岡県福岡市）と、「東京R不動産」のコンテンツを構築してきたR不動産株式会社（東京都）により運営サポートされているプロジェクトである（福岡R不動産ホームページ）。

この事業連携によって移住支援ホームページ「SUMITSUKE 那珂川」が2016年3月に開設されると、約1年間に70件以上の問い合わせを集め、南畑を知る第一歩として効果を発揮した。同ホームページは、空き家物件情報はもとより、住民インタビューなどを取り上げて、閲覧者が暮らしを想像できるようなコンテンツとなっている。

2017年には、中ノ島公園にあった休憩所を改築して移住交流促進センター「SUMITSUKE 那珂川」がオープンし、先住者と移住者が交流を深め、地域での関係づくりを行う拠点が作られた。さらに同年には、協議会メンバーの添田繁昭氏ら3名が中心となり「株式会社 南畑ほうぶら会議」（以下、会社）を発足し、協議会での事業を法人化した。会社では、南畑で収穫されたもの

5) 工芸作家らが創作拠点として自ら南畑に移住する傾向が、2006年ごろから見られるようになっていた。こうした動きが、その後の移住者受け入れの取り組みに活かされていると見られる。

の加工・販売・開発など「南畑の場所やモノの全てを商品に」(那珂川市総務部総務課 2018) することで、地域に雇用を創出し、利益を生み出す仕組みを構築している。また、経済的な基盤を確立することが地域の活性化につながり、さらに地域の誇りを育てるという会社理念に沿って、2018 年からは「SUMITSUKE 那珂川」での移住事業や中ノ島公園の運営に携わっている。

こうした内発的發展が展開する中、民間ハウスメーカーも進出している。ログハウスなどの自然派個性住宅の販売と施工、メンテナンスを行う株式会社 BESS パートナーズ(東京都渋谷区)(以下、BESS)は、自然を感じられる分譲地開発「FuMoTo」プロジェクトを南畑で開始した。2022 年 1 月に販売開始された 25 区画は、移住交流促進センター近くに位置する。

1,080 ～ 2,000 万円代の価格帯で販売する分譲地について、BESS は「用地開発から宅地開発、住人募集などを BESS/アールシーコアが、地元事業者と共同で推進する独自事業」であり、その内容は「コミュニティ商品」であるとする(BESS の宅地開発とコミュニティ ホームページ)。「FuMoTo」という商品名も“五感で自然を感じ手間をかける暮らしを楽しむ暮らし”を「禁ぐらし」と名付けたところに由来する⁶⁾。

こうしたハウスメーカーによる「コミュニティ開発」の背景には、持続可能な地域社会を目指して継続されてきた南畑での取り組みと、その蓄積によって作り出された南畑や那珂川の地域イメージがあると考えられる。地元からローカルベンチャーが誕生するような南畑の人や場所の資源がブランド力を帯びて、民間企業の新しい動きを呼び込んでいるのではないだろうか。2023 年度に南畑小学校の児童数は、12 年ぶりに 100 名を超える見通しとなった(西日本新聞 2023 年 4 月 5 日)。地道な取り組みは着実に成果を生んでいる。

4. 駅前ビルに「場所」を作る試み

博多駅まで新幹線車両で 1 駅 8 分始発終着で移動できる交通の利便性は、福岡県内他市町村には見られないものである。その存在は那珂川市の発展と

6) 分譲地の購入希望者にはこの「禁ぐらし」の価値観と、BESS によって設定された“倫理観”への共感が求められる。倫理観の 6 か条は「禁六範」(フモトロップン)と名付けられ、BESS が住人に求める共有すべき思考と行動の原則が書かれている。具体的には「挨拶」や「されて嫌なことはしない」というものから、「独り占めより共存」「正しいことは控えめに」「フェアが原則で受益者負担、原因者責任」といった踏み込んだものもある。

切り離せない。博多南駅前ビルはある意味で那珂川市の“顔”であり、その利活用をめぐる姿勢は市にとって重要な意味を持つ。

市は2015年、まちの魅力を発信するための「まちづくりオフィス運営事業」の拠点を博多南駅前ビルに設けた。2018年には、ビル全体の管理委託⁷⁾を那珂川市と博多南駅前 Hug 組の協同プロジェクト「こととば那珂川」（以下、こととば）に委託し、「ナカイチ」としてリニューアルオープンした。その結果、利用者の伸び悩みが課題であった駅前ビルにつながるの渦が生まれ、駅前ビルは多くのキーパーソンを生み出す場所として機能するようになった。

中でも、こととばの取り組みをきっかけとした文化的事業の展開は無視できない。例えば、地域の歴史を歌詞にした民謡製作がある。博多南の歴史を詰めこんだ「クジラ踊り」という民謡の創造は、博多南駅前ビルの外観がクジラのような形をしているという発想からきたもので、地域住民から聞いた地域の歴史を歌詞にして、8番にわたり作成されている。伴奏には、川のせせらぎや新幹線の音、お店での「いらっしゃいませ」といった声かけなど、市内で耳にする日常の音が盛り込まれ、盆踊り用の振付には地域の人の働く仕草が盛り込まれた。

盆踊りの振付や伴奏は、その時その時に関わる人によって様々なバージョンがあり、そのどれもが博多南の歴史や個々の人の想いにつながっている。それゆえ、クジラ踊りを一つのバージョンに閉じ込めて、イベントや行事で儀礼的に流すような「ただのコンテンツとして消費」するような動きには距離を置きたいと制作に関わった人々という。クジラ踊りに込められた意味を知り、感動した人が緩やかに繋がり合いながら使うことを期待している。

文化を生み出し発信しながらも、それを決めつけて固定的なものとして扱わないという姿勢は、ナカイチという場所の運営にも表れている。こととばではナカイチを決まった目的のための場や特定の誰かの場にするのではなく、多様な価値観を持つ人が気軽に入ってこられる場にしようとしている。場所の機能や役割を決めつけず、固定しないからこそ、市民ひとりひとりが自分のこととして、主体的にまちづくりに携わることができ、新たなチャレンジも可能になるという。

誰のものにもしない代わりに、市民全てにつながり得る場所にするという

7) これには博多南駅に隣接する博多南駅前ビルのほか、博多南駅前公園・博多南駅前広場・博多南駅前自転車駐車場の4つの公共施設が含まれる。

方針，すなわち場所の役割をあえて定めず，目的に応じて運営者が変えていくという姿勢は，取り組みに共感できない利用者の足が遠のくというジレンマも抱えている．“誰も取り残さない”公共施設として引き受けざるえない側面とのバランスを取りながら，那珂川市唯一の駅前ビルは今日も開かれている．

5. おわりに

福岡県（都市圏）の魅力は，都市的生活と自然との近さにあるとも言われている．本稿では，まさにその魅力が存在する地域として那珂川市を取り上げた．2018年に市へ移行した那珂川市では，1970年代後半から市北部を中心に宅地化が進行し，人口も急増した．他方，南部の中山間地域では人口減少が止まらず，これへの対抗策として2012年ごろより移住者の受け入れ政策に取り組み，成果を生んでいる．福岡市都心部へのアクセスを担う市内唯一の鉄道駅前ビルでは，市民のための文化的事業が創造され，駅前ビルに付加価値を根付かせている．そうした取り組みは，那珂川市を単なるベッドタウンではなく個性のある自治体とさせ，翻って福岡都市圏の魅力と持続的開発を支えている．

福岡県内各市町村に存在するこうした地道な取り組みこそが，福岡都市圏の持続可能性を支え，新たな動きを呼び込む力となっていることを最後に強く指摘しておきたい．

参考資料

「角川日本地名大辞典」編纂委員会・竹内理三編（1991）『角川日本地名大辞典 40 福岡県』角川書店

内閣府「小さな拠点情報サイト」取り組み事例（検索日 2022 年 1 月 20 日）

https://www.cao.go.jp/regional_management/doc/effort/event/caravan_01.pdf

那珂川市 総務部総務課（2018）「ここから那珂川市 那珂川市市勢要覧」

那珂川市 総務部統計企画課（2021）「2020（令和2年度版）統計なかがわ（那珂川市統計書 19号）」

<https://www.city.nakagawa.lg.jp/uploaded/attachment/19482.pdf>

西日本新聞（福岡）2023 年 4 月 5 日「福岡・那珂川市の南畑小学校，廃校

の危機一転 12年ぶり 100人台に」(検索日 2024年3月20日)

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/1076481/>

日本テレビ「アナザースカイ」(検索日 2024年3月20日)

<https://www.ntv.co.jp/anothersky2/articles/2188wdrnuw0zbaxkdes.html>

福岡県庁ホームページ「福岡の魅力」(検索日 2024年3月20日)

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/life/9/76/>

福岡県 移住・定住ポータルサイト「福がお〜か暮らし」(検索日 2024年3月20日) <https://ijuu-teijuu.pref.fukuoka.lg.jp>

福岡 R 不動産 (検索日 2022年1月20日)

<https://www.realfukuokaestate.jp/about.php>

BESSの宅地開発とコミュニティ (検索日 2024年3月20日)

<https://fumoto.bess.jp/>

平凡社地方資料センター(2004)『日本歴史地名大系第四巻 福岡県の地名』
平凡社

寄藤晶子(2022)「那珂川市の研究～人口, 土地利用, 農業, 交通, 観光,
まちづくり～」福岡女学院大学教職支援センター『教育実践研究』6,
67-77.

謝辞

本稿は, 2022年度に福岡女学院大学現代文化学科「現代文化演習」(3年ゼミ)で実施した地域調査の成果(寄藤2022)を加筆・修正したものです。当時の調査にご協力頂いた皆様に感謝いたします。